

# なにわの水舞台

## - 浪花百景の現象学的分析による空間の再構築 -

### 記憶

どこへ進むかを知るために  
どこから来たかを忘れてはいけない

### 都市の記憶

都市の景観はこれらの社会の記憶を表象する。ある街並み、ある場所、そこには人々の記憶が充満していた。

近代化以降、再開発により都市の特性や空間性を一挙に変転させた。空間の大幅な変化、均質化した景観はその場所に住む人を一時的あるいは永続的にその場所から引き離し、人々の記憶を忘らせてしまったといえる。

### 記憶の醸成

失われてしまった場所性を再考することで、昔より紡がれてきた面影を残しつつ、**人々の記憶が場所と結びつくことで社会の記憶を醸成すること**を目的とする。

### 水都なにわ

水運に支えられて経済と文化の中心的都市として発展し、堀川と川船が街に独特の風情ある景観をもたらした水の都となにわが挙げられる。

### 水景の損失

なにわにおいて、川を中心に形成されていた街は陸路を中心とした景観へと変化してしまった。なにわの美しい水景は姿を変え、単に防災の配慮から高い防潮堤が作られ、また道路が水辺を貫通している。このことから人々は河川や堀割の意味が忘れ去れてしまった。

### 水景の現象学的考察

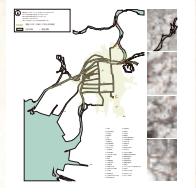
再考するにあたり、歴史の読み替えが必要であるといえる。**場所の同一性を決定し、常に新しい見方でそれを解釈する。**その手法として**水景を現象学的に捉える**ことを挙げる。現象学的に扱うことは時がたっても、見飽きるものではなく、形態の良し悪しに関わらず、普遍性をもつことを意味する。



### 浪花百景

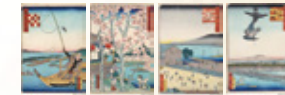
手掛かりとして江戸期なにわの水景を描いた「浪花百景」に着目する。

なにわの名所風物を描いた100枚のうち、水景を描いたものは47件存在する。今回この47件を分析対象とし、構図や空間分析を行う。錦絵を用いてその場所の特性を把握する。



### 構図の分析

47件分析対象の視点場(どこから見ているのか)を解析する。結果として8種類に分類することができた。**河川の上から / 陸上から / 空中(陸)から / 空中(河川)から / 空中(橋)から / 橋の上から / 舟の上から / 建物の中から**



**範囲を限定するために視点場抽出範囲(どこまで描かれているか)を把握する。**近景 / 中景 / 遠景という距離によって景観の捉え方が違うことがわかる。



Water stage in Naniwa

-Reconstruction of space by phenomenological analysis of Naniwahyakkei-

水の質的イメージ  
 ガストン・パシュールによると、水の質的イメージについて表面では様々な変化することがあっても、**深いところで変化することなく同一性を保ち続ける**という特質を備えている。また**内奥性**も水の重要な性質である。それは単に空間的位置関係を示すものでなく人間の精神と共通する性質も含意されている。内密性と深さは一体のものであるという。**錦絵に描かれている水の景観に関しても季節や時間、人々の状況、周辺の環境によって様々な意味合いを持っていると考えられる。**そこで以下の通りに挙げられるように水のイメージを5つの類型に分類を行った。

- ①**欲望する水**…人の移動と同時に周りの世界に内属させる
- ②**継承する水**…祭や儀式を通じて鮮やかに神聖さが浮かび上がる他界空間
- ③**移ろいゆく水**…季節や天気により人を魅了する水の自然さ
- ④**躍動する水**…人々の営みにより水空間が生活や文化の舞台になる
- ⑤**表徴する水**…シンボル（月や太陽、大阪城、両本願寺）を強調する

水景の実存的空間構成  
 ルドルフ・シュルツによると空間とは定位における一つの特殊な部類ではなく、あらゆる定位にみられる一側面なのである。定位とは人間がいろいろな対象に向かって行われる方向性のことを意味する。つまり錦絵で描かれた水景は作者だけでなく、**様々な人が想像する都市のイメージを収束させたもの**である。だから錦絵では写真と違って前景中景遠景と絵の中で分かれており、レイヤーを重ねることで奥行きを感じさせている。そのため人間の行為や視線に着目しながらその志向がどのように形成されているかを理解しなければならない。今回相互作用を分析し、図式化することで錦絵の空間構成を把握する。

**番号**  
-----  
視点場分布図に併記し番号

**図版**  
-----  
淡墨百景で描かれた錦絵

**分解図**  
-----  
錦絵は前景と遠景を意図的に組み合わせて画面構成しているが、奥行きを感じさせる空間構成はしていない。その空間のなかに水がどのように存在しているか、ルビベク・シュルツによる「実存・空間・建築」による

**空間構成**  
-----  
「ルビベク・シュルツ」による「実存・空間・建築」による  
 都市の構造的特徴は「場所・通路・領域」の概念で捉えられなければならない  
**場所**：あらゆる場所の中心は「行為の場」である今回、描かれた高性性対象物と対象物が描かれたレイヤーを抽出  
**通路**：人間の行動によってつけられる方向性、その他にも自然界から影響される場合もある今回、抽出した対象物の行動視線が指し示す方向性を抽出  
**領域**：質的な限定をつけた区域、境界が決定される地域の形成が強化される今回、領域を規定する要素（自然・生活文化・天候）に着目して領域を考察する  
 図版に関しては領域は領域内で行われる場合もあるが、河川を数ヶ所通過する多岐の空間も入っていることが多い  
 ↓  
 図式化

**錦絵名称**  
-----  
淡墨百景に描かれた錦絵の名称

**現在写真**  
-----  
淡墨百景に描かれた錦絵に近いアングルで撮った写真

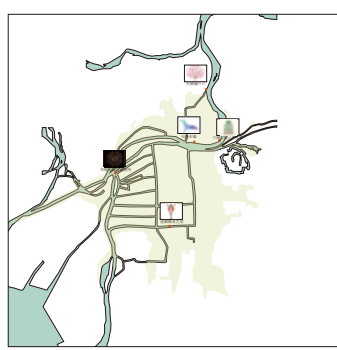
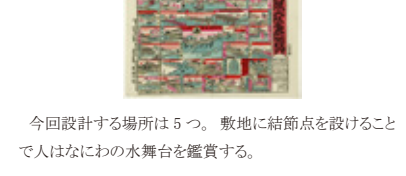
**説明文**  
-----  
描かれた錦絵に関する空間構成などを行った分析  
 ・視点場：どうい立場から描かれたのか  
 ・主体性人物：誰の視線で描かれたのか  
 ・身体性対象物：どういものが描かれているのか  
 ・空間構成：近景 / 中景 / 遠景（これらは同時に描かれているものもあるがどこを重視しているかで区別）  
 ・スカライン：今回対象としている河川が描かれた領域は必ずしも描かれている。そのほか何でスカラインが形成されているか  
 ・ランチャー：方向を位置付けるものは何が描かれているか

現象の読み替え  
 ルドルフ・シュルツはこういう。「…われわれは景観の空間について語りながら、家を浮かべる。一山脈は壁、原野は床、河川は通路となり、海岸は境界であり、連山の最低点は扉口である。」  
**レイヤーに分解した現象エレメントのシエマを想像し、その次に認識した対象を現在に見合った空間のなかに位置付けることでそれらの対象と特定の場所に結び付ける。**

今回設計するにあたり、錦絵に描かれたレイヤーからそのシエマを想像し、そこから現代に見合った再解釈を思いつく限り書き出した。そして無秩序になることを防ぐためにルールを決め、再構築を行う。



全体計画  
 なにわの都市構造は時代を重ねるごとにますます細分化され、なにわ全体のイメージを想像することが難しい。大阪城や道頓堀、梅田など場所ごとの独立性が強い一方、領域は水の回廊で繋がっている。水景と双六を掛け合わせた水景双六を考案する。水景を訪ねて都市を回遊する。



現象	シエマ	再解釈				
		器物・自然	構造物	空間体系	その他	その他
<div style="display: flex; flex-direction: column;"> <div style="margin-bottom: 20px;"> <p><b>近景</b></p> </div> <div> <p><b>中景</b></p> </div> <div> <p><b>遠景</b></p> </div> </div>	<p>移動している 浮かぶ 見る 見られる 運ぶ 自分だけの居場所 冷たい 綺麗 涼しい 浸る 流す 揺れる 渡る 繋げる 境界 立ち止まる 振り返る 名残惜しむ 目印 見渡す 集まる 見つめる ワクワクする 抜ける 玄関口 停まる 受け入れる 休憩する 中間領域 安心しむ 連立 掲げる 目立たせる 交わる にぎわい 背景としての役割 速くを感じる 圧倒的 広がる 時間を感じる 癒し 招き寄せる 夢になる 適度な緊張感 映す 導く 喚起する 想像させる 想像する 戯れる</p>	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 48%;"> </div> <div style="width: 48%;"> </div> </div>				

設計提案 1: 欲望する水

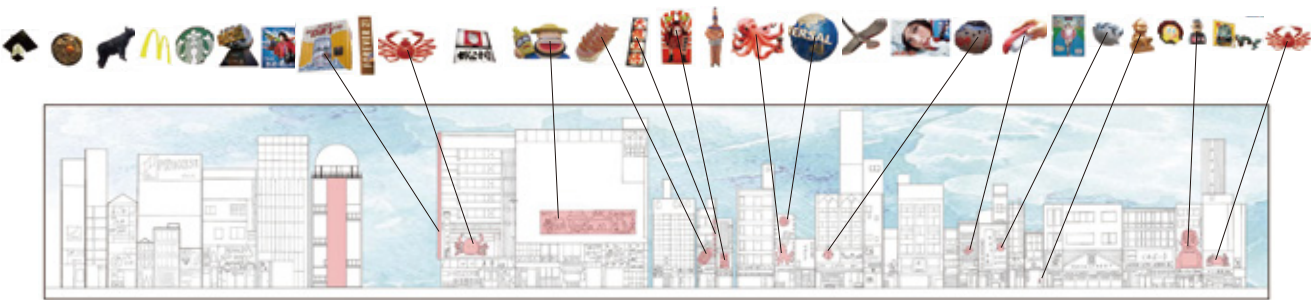
— (表 - 朝 - 道頓堀川) と (裏 - 夜 - 道頓堀筋) で変わる水景に誘われる



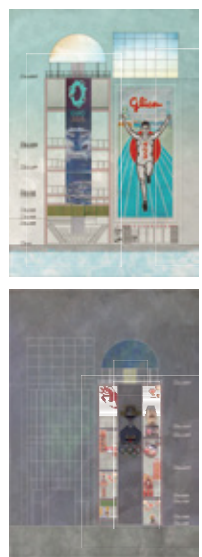
概要 一道頓堀

現在、私たちが思い浮かべる道頓堀は道頓堀川の南側の陸の道だが、昔では水上交通の方が一般的であったため、錦絵には水から図が描かれている。昔は舟で岸へ着き、芝居小屋のなかを通して、道頓堀筋へと出ていった。いまでは道頓堀筋と道頓堀川の空間は(表)と(裏)の関係が反転している。人々はグリコの看板をみるために筋から川へ移動している。

今回欲望する水の代表例として道頓堀を挙げている。唯一人々の視線を引き付け記憶に残す装置としてグリコの看板。そこで欲望させる環境として看板に着目する。時間によって表情が変わる看板の様相によって異なる水景に誘われる。



設計してできた水景には朝と夜で異なる様相が現れる。外が明るいときは外皮に張り付いている表(道頓堀川の看板)が人々の欲望を駆り立て、夜になると内部の光が漏れて、裏(道頓堀筋の看板)たちが表に飛び出そうとしてくる。人々は表裏反転により建物の境界性、現実と別世界の境界性がいまじいになる。こうしてできた水景には浪花百景で描かれた道頓堀を暗喩的に存在している。



きょうろきでできる空中庭園

再解釈したレイヤーは建築の芝居小屋。芝居小屋は建築技術というからんが、その影の影を遊ぶようにして築き立てた人々の集まり。芝居小屋の中心は歌舞伎の演目自身を演目としてその空間を共有して行われる。ここでは芝居小屋のなかで人々の動きを軸として観望された。レイヤーとして見ると、この空間は観望の場として機能している。

道頓堀の欲望の象徴

再解釈したレイヤーは建築。この建築は芝居小屋を演目とする広告のようだが、しかし、その空間は演目として築き立てた人々の集まり。芝居小屋の中心は歌舞伎の演目自身を演目としてその空間を共有して行われる。ここでは芝居小屋のなかで人々の動きを軸として観望された。レイヤーとして見ると、この空間は観望の場として機能している。

現実に見える階段

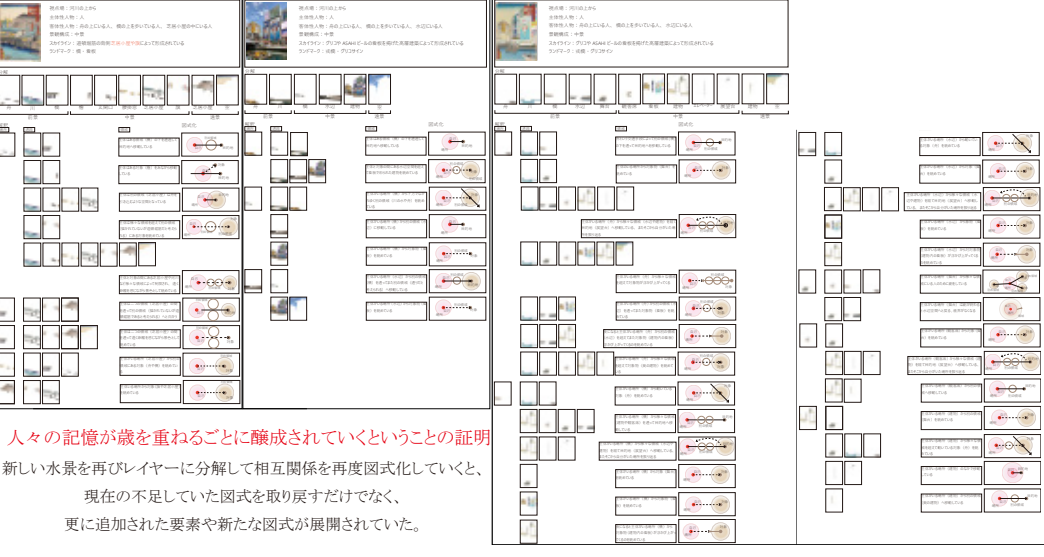
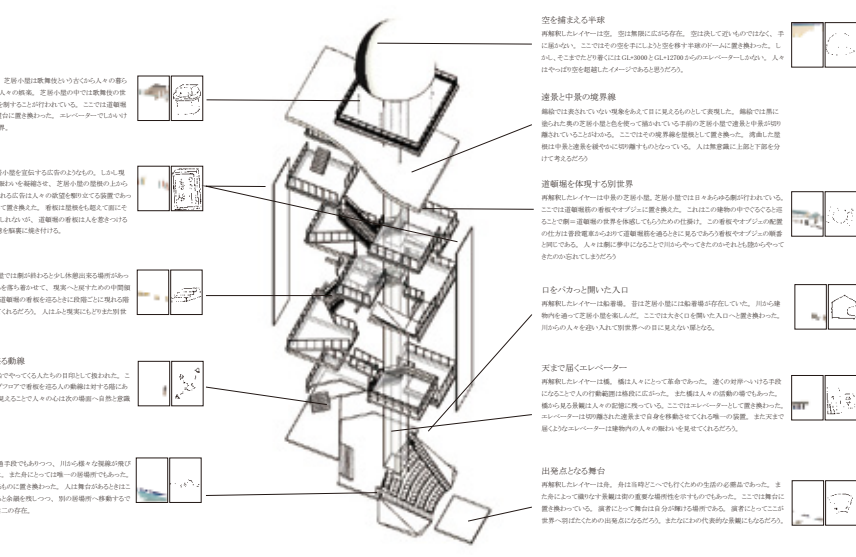
再解釈したレイヤーは建築。芝居小屋では観望の場として築き立てられた。現実に見える階段は、芝居小屋のなかで人々の動きを軸として観望された。レイヤーとして見ると、この空間は観望の場として機能している。

どこからでも見つけることが出来る視線

再解釈したレイヤーは建築。観望の場として築き立てられた。どこからでも見つけることが出来る視線は、芝居小屋のなかで人々の動きを軸として観望された。レイヤーとして見ると、この空間は観望の場として機能している。

動線にもなる観客席

再解釈したレイヤーは建築。観望の場として築き立てられた。動線にもなる観客席は、芝居小屋のなかで人々の動きを軸として観望された。レイヤーとして見ると、この空間は観望の場として機能している。



人々の記憶が歳を重ねるごとに醸成されていくということの証明  
新しい水景を再びレイヤーに分解して相互関係を再度図式化していくと、  
現在の不足していた図式を取り戻すだけでなく、  
更に追加された要素や新たな図式が展開されていた。

設計提案 2: 継承する水

— 日常と非日常で入れ替わる水景と共に意味合いが変わる



概要 一戒島天満宮御旅所

御旅所とは神社の祭礼の際、神が巡行の途中で休憩、または宿泊する場所、あるいは神幸の目的地をいう。

しかしいまでは神社が他の場所へ移築されたことにより鳥居もなくなり、その儀式もなくなってしまった。儀式ではこの船の上から神童の手によって神鈴が流され、ご神意をおうかがいする。儀式は人間が人の手によって人智を超えようとする試みである。

この意識を忘れないために儀式で行われる人間の行為に着目して設計を行う。神は高いところに降り立つという。天神祭になると垂直に伸びた壁は神が舞い降りる台座に置き換わる。人々はその日だけ神の存在、儀式の神聖さ、昔の人の考えや行為を思い出すのである。しかし日常において、この近くには学校があるため、学生が隣の図書館・ギャラリーをメインに使う。神が舞い降りる台座は人に意識されることのないただの壁や通路である。



境界を跨ぐ行為

再解釈したレイヤーは舟(斎船)。今回描かれたのは天神祭の時にだけ現れる。天神祭で行われる鈴流神事をこの舟で行うことで御神意をお移しつづ、観を行う。ここでは通り抜けるに置き換わった。境界を跨ぐことで新たな世界へと帰属する。

神々が降り立つ壁

再解釈したレイヤーは鳥居。鳥居は神社へ通じる門、神社のシンボル、神社の中に不淨なものが入るのを防ぐ役割を担っている。しかし現在ではその重要性のある壁に置き換わった。神は高い所に降り立つという。この壁は神にとっては台座である。

日常の代表例: 学生

再解釈したレイヤーは林と舟。音楽として描かれた林のおくへの営みを感じる舟が描かれている。ここでは日常の営み(学校生活)の代表として学生に置き換わった。学生は普段この記念塔を無意識的に使いこなしている。

境界としての石垣

再解釈したレイヤーは雲。錦絵によく描かれている雲は景観のエレメントを隠す役割をもっていた。ここでは石垣に置き換わった。石垣はあえて水と陸を分ける装置である。これはハレ(いづれも日常)とケ(天神祭)を分けるためである。

意図的な境界としての扉

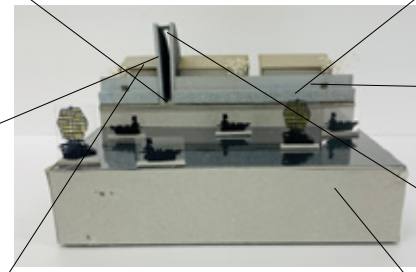
再解釈したレイヤーは川。川は此岸と彼岸の境界である。また此岸(この世)と彼岸(あの世)を分けるものである。ここでは扉として置き換わった。あえて二重に重ねられた境界により以前の錦絵が忘れられてしまった鈴流神事の神聖さを感じる。

象徴的な光

再解釈したレイヤーは雲。雲は錦絵のなかで象徴的なビジョンであった。雲の余白的な効果により何らかのメッセージ性を含まれている事がわかる。ここでは光に置き換わった。光は高次の認識(神の存在)を表すものである。

限定されたデザイン

再解釈したレイヤーは空。空はいつも見るのに祭りや花火が行われるこの空は普段の静かな様子とまるで違って見える。ここでは時間的に置き換わった。デザインによって日常と非日常で使い方が異なることでより非日常が強まるのである。

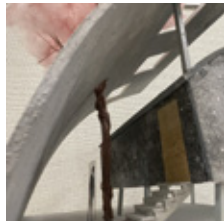




概要—天満樋の口

水は澄み、屋形船が通ずるようになり、堤に新しく桜が植えられると、川崎の木村堤まで桜並木が連なり、対岸の桜ノ宮とを合わせ絶好の花見の名所となった。しかし川の兩岸にあった桜のうち、彼岸の方は建物工事のため切り切られてしまっ...

そのため対比的に此岸の桜は建築によって守られるものに置き換え、設計を行う。桜を建築が囲む。しかし桜は人間の力を超えて上へ上へ延びる。桜の散る花びらと空模様が天窓に映り、人はその美しい姿をただ眺めるのである。舟から兩岸で対照的な姿を見ることが出来る。水景を通して人間へささやくのである。



左：自然を守りながら建築を建てる。右：自然を切り開きながら建築を建てる

桜独り占めホテル

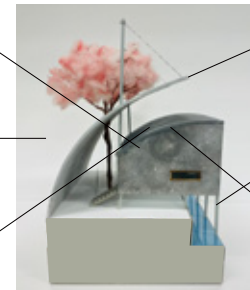
再解釈したレイヤーは桜。桜は鑑賞する対象であり、人々はわざわざここへ赴いた。ここでは二人用ホテルに置き換わった。守られた桜を独り占めしているのである。

変化し続ける風景

再解釈したレイヤーは川。川の流れるは季節や天気によって様相が異なる。ここでは時間に置き換わった。川の流れるは時間の流れである。ホテルから見る風景も川と同じように日々刻々と変わっていく。此岸では桜がさき、散りゆくように彼岸では建物がどんどん建つように

空を映し出す天窓

空の色は時間帯によって変化する。ここでは天窓に置き換わった。天窓から降り注ぐ光や桜の散りゆくさまが内側からも感じる。



桜を守る吊り壁

再解釈したレイヤーは桜。錦絵には川の兩岸に桜があった。しかし現在では此岸にしか桜はなく、彼岸は建物工事により桜が切り切られてしまった。ここでは吊り壁として置き換わった。壁は建物だけでなく桜も守るだろう。

浮いた建築物

再解釈したレイヤーは舟。舟は川の上存在している。ここでは浮くに置き換わった。水の上にある建築は中にあるのの外にいるようなそんな不思議な体験を与えてくれる。

桜に寄り添う建築

再解釈したレイヤーは屋台。屋台は桜のために作られた建築である。ここでは湾曲した屋根に置き換わった。桜の枝が大きく広がっていてもいように

設計提案 4: 躍動する水

—増築と減築によって変わり続ける水景と時代を超えても変わらない山



概要—天満市場

幕府の保護を受けた大坂で唯一の青物市場で、対岸は八軒家浜という大川の一等地に広く問屋が並んだ。秋の松茸・栗、冬の蜜柑などは夜市が立ち、こうこうと輝く明月や提灯の明かりのなかで取引が行われ、年中無休の営業で活況を呈した。しかしいまではこの場所には天満市場はなく、テニスコートに変わってしまった。テニスコートでは限られた人だけが訪れない。テニスをしている人の声だけが聞こえない。

ここでは人やモノが入り替わるイメージを仮設建築に置き換え、設計を行う。ここでは常にどこか工事が行われている。時にはライブ会場に時には主婦たちのマーケットに成り代わる。きっとここでは常に見える水景は変わるであろう。水景から人の賑わいが感じられる。



人を集まる看板

再解釈したレイヤーは舟。舟は景観を彩るためのエレメントで、人がどこへ移動するための手段でもある。ここでは看板に置き換わった。主要する看板は人の視線をあつめるための装置である。

ルールのない動線

再解釈したレイヤーは川。川の流れるは人間の力では扱えない。季節や天気によって変わってしまうものである。ここでは自由な動線に置き換わった。人の気持ちもまた何にも制限されない。行きたいところへ行くのである。

圧倒的クレーン

再解釈したレイヤーは山である。山は空高く人々のまえに立ち上がる。ここではクレーンに置き換わった。工事現場の中では圧倒的な色彩を放っている。静しとも垂直のクレーンと水平に広がるアーチによって山のような存在になる

ブラックボックスの工事現場

再解釈したレイヤーは鳥。空高く飛ぶ鳥が住む世界は人間の境界とは違ふだろう。ここでは工事現場に置き換わった。中で何が行われているかわからない。まるでブラックボックスである。

連続するアーチ

再解釈したレイヤーは橋。橋は遠くの陸と陸を繋げるため、脚部の連続による景観が壮大なものである。ここでは連続するアーチに置き換わった。連続するアーチは水平に広がる様相を強調する。

力動的建築

再解釈したレイヤーは市場。市場では人や市場に売り出される野菜や果物が毎日のように変化する。ここでは増築と減築に置き換わった。増築や減築によって建築も変わるだけでなく、人の集まり方も異なってくる。

終わりの知らない建築

再解釈したレイヤーは空。空は限りなく続いている。ここでは変わり続ける仮設建築に置き換わった。定まった建築ではなく、時代や時期によって機能自体が変化し続ける

設計提案 5: 象徴する水

—屋根の連続性によりシーンを強調する水景



概要—川崎ノ渡/月見風景

この川崎村と大川対岸の備前島とを結ぶ渡しが川崎渡で、鯉江川に架かる備前島橋（御成橋）、寝屋川に架かる京橋を経て、その向こうに大坂城の雄姿を望むことができた。しかしいまは舟渡はなくなり、橋ができた。川は埋め立てられ、その上を電車が走り、高架により奥への視線は分断され、大阪城がのぞくように見える景観へとなりました。

今回、失われた様々な連続性を設計に落とし込む。ここでは失われた縦の連続を取り戻すために連続性を持たせた屋根にした。また川による水平の連続性は人や自転車、屋根による横の連続性に置き換わり、この場所は人や自転車の停留所になる。月はシーンを強調するものであるため、今回機能を持たない屋根にすることで屋根の意味合いを強める。



ヨコ方向の連続（特殊だが3つのレイヤーの再解釈）

再解釈したレイヤーは3つある川だ。川は真横ぐ水平に広がっており、それが大阪城までの間に3つの川すべりへいえることである。ここではその横方向の動きに置き換わった。人や自転車や屋根の連続がそれに値する。

人と自転車が集まる停留所（特殊だが2つのレイヤーの再解釈）

再解釈したレイヤーは2つある建築群だ。人々が集まる場所を意味する。ここでは人と自転車のたまり場としての停留所に置き換わった。屋形船から降り立つ人と屋形船に乗る人たちの交流の場である。

タテ方向の連続（特殊だが2つのレイヤーの再解釈）

再解釈したレイヤーは2つある橋だ。大阪城までほぼ一直線に向かっている。しかしいまでは川が埋め立てられたことで橋がなくなり、その連続性が壊れている。ここでは縦方向の動きに置き換わった。大阪城に向かう屋根の連続がそれに値する。

浮く建築

再解釈したレイヤーは舟。舟は川と建築が融合してできたものである。ここでは浮くに置き換わった。建物の水の上から続くことで陸と川の連続性を高めるものになるだろう。

△屋根

再解釈したレイヤーは大阪城。大阪城はなにを象徴する建築物である。三角の入り屋根が特徴的である。ここではトラス屋根に置き換わった。構造をあえて見せることで大阪城を暗示的に示している。

機能をもたない屋根

再解釈したレイヤーは満月の空。錦絵に描かれている満月はよくその絵を強調して、メッセージ性を強めている。ここでは機能のない屋根に置き換わった。この屋根は雨風から守ってくれない。ただ下のトラス屋根を強めるのである。